

# 大学通信教育課程の意義に関する卒業見込者の意識

A survey of students regarding the significance of university correspondence courses

通信教育課程	尾崎 啓子	浅野 雅子	大塚 美香	浅見 美穂
Correspondence Course	Keiko Ozaki	Masako Asano	Mika Otsuka	Miho Asami

**抄 録** 本稿は、日本女子大学通信教育課程に在籍する正科生で卒業見込者の協力を得て行った、課題レポート分析の報告である。2022年度から2024年度までの卒業セミナーを受講した学生318名分のレポートの内容を、KJ法を援用して分類・分析した。通信教育課程での学びを通して①自分の財産になったこと、②社会に還元し・貢献できると思われること、③通信教育に期待すること、の3点について、キーワードを抽出して検討した。①財産では「学習」「精神的な充実」「仲間・教員との出会い」、②社会貢献では「現在とこれからの仕事・活動」「地域社会」「学びの継続」、③通信教育への期待では、「授業形態と内容の充実」「学びやすい環境づくり」「大学の支援」「交流機会」などが挙げられた。3学科のカリキュラムの特徴と学びの成果がよく表れた結果となった。初年次教育やICT教育などの学習支援や、通信教育の認知度の高まりへの期待が大きいことが理解された。

**キーワード**：大学通信教育、卒業見込者、レポート分析、学びの財産、社会への還元

**Abstract** This paper analyzes the assignment reports of students enrolled in the Japan Women's University correspondence course who are expected to graduate. The contents of the reports of 318 students who took the graduation seminar from 2022 to 2024 were classified and analyzed using the KJ method. We extracted keywords and examined three points: (1) what has become your personal asset through learning in the correspondence course, (2) what you think you can give back to and contribute to society, and (3) what you expect from distance learning. The results clearly showed the characteristics of the curriculum and learning outcomes of the three departments. It was understood that there was a great deal of expectation for learning support such as first-year education and ICT education, and for the growing recognition of the correspondence course.

**Keywords**: Correspondence education, Prospective graduates, Report analysis, Learning assets, Social contribution

## 1. 研究の背景と目的

大学通信教育は、1947（昭和22）年に制定された学校教育法で初めて公式に認められた。1940年代後半から6大学が施行し、1994（平成6）年以後はほぼ毎年、大学通信教育の開設が続いている<sup>1)</sup>。文部科学省による2023（令和5）年度の学校基本調査によれば、学生数は184,499人で大学通学課程の学生数の7%にあたり、特に2021（令和3）年のコロナ禍以後に増加傾向が見られる。年齢構成では60歳以上の高齢学生（13.7%）と22歳以下の若年

学生（18.4%）の増加が顕著である<sup>2)</sup>。最終学歴別入学者数（2022（令和4）年）では、7割が高卒以外という調査結果もある<sup>3)</sup>。これまで、大学通信教育は「学びの継続」「学び直し」「リカレント教育」といった生涯教育の推進に一定の役割を果たしてきたが、今後さらに、多様な学生が持つ学びのニーズに応えることが期待されているといえよう。

日本女子大学家政学部通信教育課程（以下、本学通信）は、創立者成瀬仁蔵が1908年に女性の生涯教育と高等教育の発展を期して創設し、1949年新生発足から数えて2024年には創立75周年を迎えた。

2024 年現在、家政学を通信教育で学べる唯一の大学という特色を持つ。本学特任教授らによる本学通信の卒業生を対象として 2019 年に実施した調査<sup>4)</sup>によれば、入学目的は大学卒業、資格取得、生涯学習が多く、本学通信選択の理由は家政学の学びと伝統への期待があり、卒業後は進学、資格取得、就職、キャリアアップなど様々な展開が見られた。専門科目を深く学んだことや卒業したことが自信となり、本学での学びがその後の生き方や日常生活、地域活動など多方面で活かされていることがわかった。この調査の対象は 1952～2019 年の卒業生であったが、近年ますます生涯教育への関心が高まり、コロナ禍を経て、開講科目のバラエティやメディア授業の拡充といった学びの内容と形式にさらなる多様性が求められていると考えられる。

本研究は、人生 100 年時代を迎える現代における大学通信教育の意義を、本学通信卒業見込者による学生生活のふり振り返り所感を通して探索することを目的とする。学生が、学びの過程でどのようなことに困難を感じ、どのようなことを学びの財産と考え、学びの成果を卒業後の生活に活かしながら社会貢献していこうと考えているのかを分析することにより、今後の本学通信における教育の充実に向けた手がかりとしたい。

## 2. 対象と方法

### 2.1 対象

本学通信は児童学科・食物学科・生活芸術学科の 3 学科で構成されている。在籍する正科生で、2022 年度、2023 年度、2024 年度の 7 月末に 2 日間で実施した卒業セミナー（2022 年度、2023 年度は軽井沢卒業セミナー）を受講した 328 名を対象とした。各年度、各学科の受講者（課題レポート提出者と同じ）数と課題レポート（以下、レポート）分析について同意した者の人数は表 1 の通りである。レポート提出者 328 名の内、レポートを本研究の対象とすることに同意した者は 318 名で、同意率は 97%であった。

なお、卒業セミナーの受講対象者は、セミナー受講年度の 9 月又は 3 月に卒業見込の正科生であり、受講資格には基礎科目・教養科目・学部共通科目・学科科目における必要単位をすべて修得済みという条件が設定されている。

表 1 対象者数

	児童学科	食物学科	生活芸術学科	合計
2022年度	36(38)	18(18)	32(34)	86(90)
2023年度	51(55)	8(8)	39(41)	98(104)
2024年度	62(62)	27(27)	45(45)	134(134)
計	149(155)	53(53)	116(120)	318(328)

同意者数（レポート提出者数）

### 2.2 調査時期

2022 年 7 月、2023 年 7 月、2024 年 7 月。

### 2.3 方法

調査した各年度の卒業セミナーを受講する者が事前に提出したレポートの記述内容を、KJ 法を援用して分類・分析した。レポートは課題 1 と課題 2 の 2 つが課され、課題 1 は全受講生共通の課題、課題 2 は分科会（ゼミ）ごとに異なる課題である。いずれも 2,000 字程度で記述し、5 月中旬までに提出することを求められた。今回分析対象としたのは課題 1 のレポートで、3 つの問いで構成されている。課題文は以下の通りである。「家政学部の通信教育課程の学びを通して、①自分の財産になったこと、②自ら、社会に還元し・貢献できると思われること、③これからの通信教育に期待すること、の 3 点について、あなたの考えをまとめてください。」

### 3. 倫理的配慮

日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会に研究申請し、認められた（課題番号第 652 号）。卒業セミナー受講者には文書と口頭で研究の目的と方法、匿名性の保証、データは可能な限り量的に処理し本研究の目的以外には使用しないこと、研究協力に同意するかしないかは自由であり不同意であっても不利益は一切ないことを説明し、同意書の提出をもって承諾を得た。

### 4. 結果と考察

各学科の学生の記述内容から項目ごとにキーワードとなる言葉を抽出し、著者 4 名が話し合って分類・決定した。なお、学生ひとりのレポート項目から複数のキーワードを抽出して分類している場合が大半であるが、記述内容が少なく抽出できなかった場合もあった。キーワードにあてはまらない記述は「その他」として分類した。各項目とも複数記述を

カウントして集計し、図では母数に対する比率を示している。

#### 4.1 自分の財産になったこと

「家政学部通信教育課程の学びを通して、自分の財産になったこと」として学生が記述した内容を、①学習に関すること、②精神的な充実、③出会い、④資格・学位、⑤その他の5項目に大別した。結果を図1<sup>註1)</sup>に示す。

3学科合計でみると、①学習に関することに該当する内容はほぼ全員が記述していた。学習したい内容があって本学に入学しているので、納得できる結果である。次に多いのが③出会いであり、多数の学生がスクーリングや学習交流会などを通して『一生の友人を得た』『幅広い年代や立場の違う仲間と出会い、刺激を受けた』と記述していた。教員との出会いや授業への言及も複数あり、『先生の熱心さが伝わり感銘を受けた』『励まされた』『最先端の研究にふれている感覚があった』などの感想が見られた。②精神的な充実に関する記述も多く、57%であった。通信教育での学修には自主性が必要であるため、その厳しさを乗り越えたことにより精神的な面での自己の成長を実感している学生が多いと推察される。④資格・学位については24%であり、他の項目と比較して低かった。近年学士入学者の割合が増えており、既に学位を取得している学生が半数近くを占めていることによるものと思われる。

全体的には、いずれの項目も学科や実施年度による大きな違いは認められなかったが、2022年度食物学科対象者は、①学習に関することは他学科よりも記述が少なく、②精神的な充実は多かった。本学では、2020年度から新型コロナウイルス感染拡大防止のために遠隔授業が導入された。そのため2020年度の夏期スクーリングでは、食物学科で提供するすべての実験実習が、遠隔授業での実施となった。他の学生との交流の機会が制限されて、自分で計画を立てて学修することが強く求められた時期であったことから、やり遂げた自信や達成感、満足感などを感じる機会が多かったのではないかと考えられる。④資格・学位に関しては児童学科が23%、生活芸術学科が33%であるのに対し、食物学科は6%と少数であった。食物学科で教職を目指す学生が少ないことと関係があると思われる。

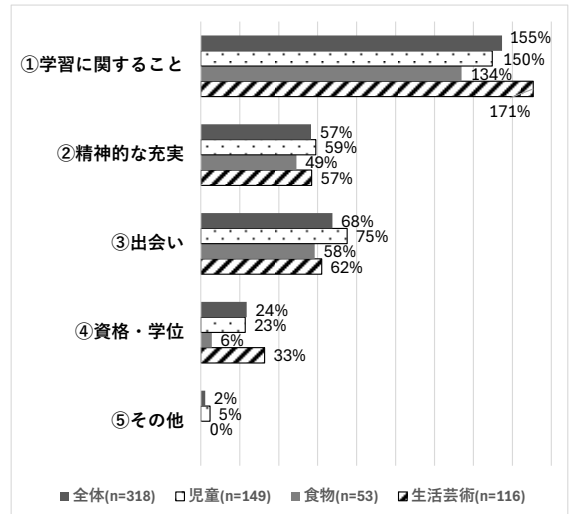


図1 自分の財産になったこと（全体 n=318）

以下、項目ごとに、学科による違いを挙げて考察する。

##### ①学習に関すること

本項目の内容は、「知識・技術（教養、授業内容も含む）」「学ぶ姿勢、計画性」「視野の広がり」「挑戦、諦めない、継続」「学ぶ楽しさ」「家政学的重要性」「情報収集・読む/考える力」に分類した。学科ごとの結果を図2に示す。

「学ぶ姿勢、計画性」については、『自己管理能力』『計画を立てて学修する力』など、「視野の広がり」については『歴史的な観点から俯瞰する力がついた』『客観的、多角的な視点を得た』、「挑戦、諦めない、継続」については『継続する力』『根気強さ』、「情報収集・読む/考える力」については、『わかりやすく話す』『自分で考えて学ぶ』などの記述があった。3学科共に、「知識・技術」が50%前後となっており、多くの学生が知識・技術を身につけたことを感じているようである。中でも学科の専門科目の知識を挙げている学生が多かったが、学部共通科目である家政学概論で『家庭・家族の歴史や意義の変化を学んだ』と書いた者もあり、本学の教育で家政学の知識も定着していることが伺えた。他の項目については、いずれも10%～30%程度であり、学科ごとの大きな違いはなかった。「家政学的重要性」では、『生活をしていく上で必要な知識を得た』『家政学的重要性に気が付いた』などの感想が見られた。このキーワードについては、生活芸術学科の

記述から、他学科の2倍以上の割合で抽出された。生活芸術学科の特徴と考えられる。生活芸術学科の授業科目は、被服学と住居学の両方の領域にまたがるために、児童学科や食物学科と比べて、生活を様々な視点で見る機会が多く、家政学的重要性を感じることが多いのではないかと推察される。「視野の広がり」については、食物学科では他学科の半分程度の割合しか示されなかった。食物学科では、実験実習を含む必修科目が他学科よりも多く、専門的な「知識や技術」を修得したことを実感しやすい反面、「視野の広がり」にふれる者が少なかったのかもしれない。

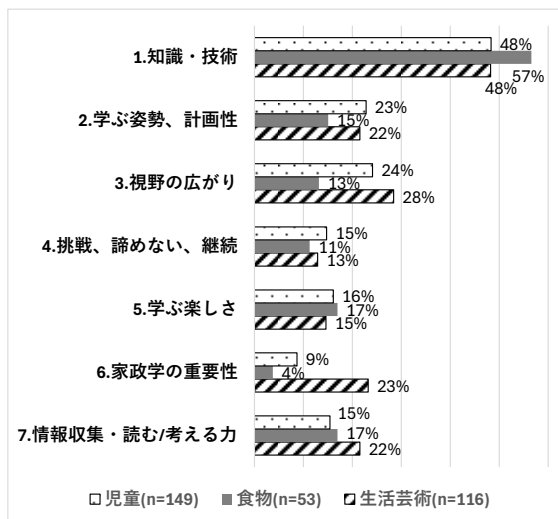


図2 ①学習に関することの内容(学科ごと)

## ②精神的な充実

「自信・主体性」「達成感・充実・満足」「生きる力・今後の人生」「仕事との両立・時間の使い方」「家族との関係」「自己理解・受容、振り返り」の項目に分けて考察した。結果を図3に示す。

「自信・主体性」は『努力して学んだ時間は自信』『時間をかけたリポートは自信になった』などがあり、「達成感・充実・満足」では、『根気強く勉強した』『確かに学んだ実感』など、「生きる力・今後の人生」は、『生き方を学べた』『今後の方向性が明らかになった』などが書かれていた。学科ごとに見ると、食物学科では「自信・主体性」を26%の学生が挙げ、児童学科と生活芸術学科では20%に届かなかった。「達成感・充実・満足」に該当する内容を

書いた者が10%程度いた。食物学科では「達成感・充実・満足」は2%で、「生きる力・今後の人生」にふれた者はいなかった。「仕事との両立・時間の使い方」については、『仕事と家庭とライフワークとの両立を考えた』『仕事、家事、学習の切り替えがうまくできた』などの記述があった。食物学科で17%、生活芸術学科で11%であったのに対し、児童学科では5%と少なかった。「家族との関係」については家族が自立するようになったことを取りあげている者が、割合は低かったが3学科ともに認められた。母親や妻が時間を工夫して勉強している姿を見て、家族が協力するようになったことが考えられる。「自己理解・受容・振り返り」については児童学科で13%の学生が記述したのに対し、他学科の学生は2～3%であった。児童学科の授業科目には心理学関連科目が含まれ、自身のこれまでの生活を振り返り内省する機会が増えるため、自己の内面を見つめる傾向があることが考えられる。

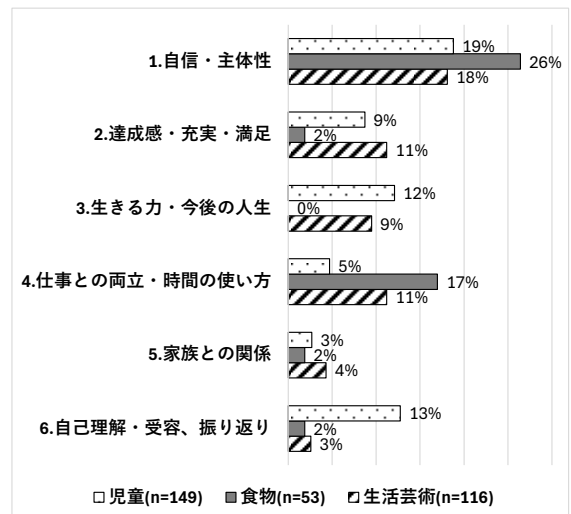


図3 ②精神的な充実に関する内容(学科ごと)

## ③出会い

「仲間・同士・友人・多様な人からの刺激」「教員との出会い・授業」の2項目に分けて分析した。結果を図4に示す。「仲間・同士・友人・多様な人からの刺激」については、児童学科54%、食物学科49%、生活芸術学科51%の学生が記述していた。『生涯の友を得ることができた』と記述している者が多く、スクーリングで出会い、学習を継続する苦

労を共有することにより、仕事上や地域社会では得られない友人を得ることができたと考えられる。仲間などからの刺激を受けたとする者と比べて「教員との出会い・授業」を記述していた者は少なかったが、児童学科では他学科より多く、21%の学生が記述していた。食物、生活芸術学科では10%程度であった。児童学科は他学科に比べて文系の要素が強く、授業中の質問などを通して教員とやりとりする機会が多くあることや卒業研究の履修者が多いことが関係していると考えられる。

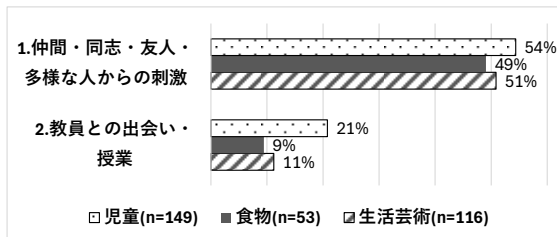


図4 ③出会いに関する内容（学科ごと）

#### ④資格・学位

「学位（卒業）」「資格取得」「大学認定プログラム」について取り上げた。「学位」については児童学科3%、食物学科4%であったのに対して、生活芸術学科では14%であった。「資格」については、生活芸術学科で18%であり他学科より高かった。本学通信は通信教育課程で家庭科教員免許を取得可能な唯一の大学であり、教員免許状取得を希望する学生は、食物学科よりも必要な単位数が少ない生活芸術学科を選ぶことが多いためと考えられる。また、二級建築士受験資格に、卒業が必要なことも関係していると思われる。食物学科で資格取得の割合が低いのは、栄養士資格をすでに取得している者が多く、フードスペシャリスト資格を目指す者が少ないためではないかと思われる。「大学認定プログラム」については、本学通信認定プログラム（芸術・子ども支援プログラム）を実施しているのは児童学科のみのため、児童学科で10%となっている。児童学科の学生にとって、関心の高いプログラムであることが推察される。

#### ⑤その他

「傾聴的態度」と「子どもを理解し問題解決に向かう力」に関する記述をした者が、児童学科でのみ2%みられた。「傾聴的態度」はカウンセリングの

基本的な態度であり、子どもに関する授業科目や芸術・子ども支援プログラムを構成する授業科目の多くで学ぶ機会がある。この態度を身につけ、「子どもを理解し問題解決に向かう力」に結びつけようとする姿勢は、児童学科で学ぶ学生の特色のひとつであると考えられる。

通信教育課程は通学課程とは異なり、自分で計画を立てて継続して学習することが求められる。卒業見込へと進んだ学生は、学科を問わず知識や学習方法を身につけているだけではなく、学習の過程でやり抜く精神力を身につけていることが伺える。またその学習過程は友人によって支えられる部分が大きいことから、友人をつくる大切さが際立った。

#### 4.2 社会に還元・貢献できること

「家政学部通信教育課程の学びを通して、自ら、社会に還元・貢献できると思われること」の課題に対して学生が考えたことを5点にまとめた。

自ら学んだことが、①現在、既に関わっている仕事や活動に、②資格取得後や就職後を含めて、今後の仕事や活動に、③自分や家族の日常生活に、④地域社会に、還元や貢献ができるのではないか、という観点に大別できた。更に学びの継続や情報発信をすることで、学びを社会生活にどう繋げていくのかという記述があった。上記の大項目の全学科の結果を図5に示す。3学科ともおよそ同様の傾向であるが、④地域社会への視点では生活芸術学科（91%）、

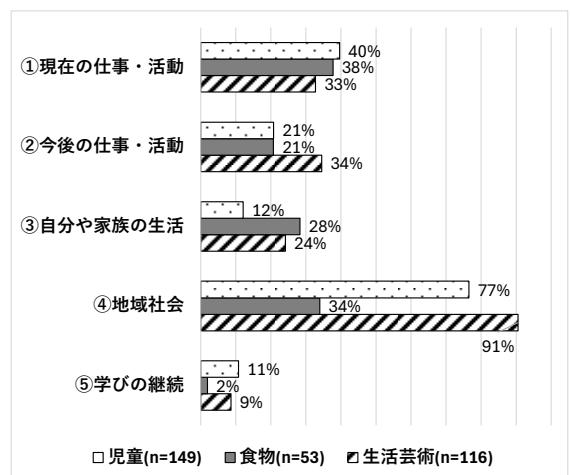


図5 社会に還元・貢献できること（n=318）

児童学科（77%）が高い傾向である。仕事や活動の詳細内容や還元・貢献できる具体的な記述は、学科の学びの内容と関連しており、学科ごとの特色が色濃く反映される結果となった。

なお、⑤学びの継続については、4.2.1 で詳しく分析する。

#### 4.2.1 児童学科

本項目に関して全般的に年度ごとの傾向に大きな違いはなく、現在の仕事や活動を通して社会への還元・貢献を考えたり、自身ができることを地域社会で役立てようとする姿勢を示す内容が多く見られた。2024年度は地域社会への貢献に意欲的な記述が95%もあり、突出していた。コロナ禍を経て人と人とのつながりの大切さや子どもの育ちを見守る重要性に改めて目を向け、大学での学びを社会に活かそうとする意識が高まったものと考えられる。

児童学科の学生の記述内容を前述の5つの観点からまとめ、考察する。

##### ①現在の仕事や活動

現在や今後の仕事・活動において還元したいとした者の割合は、図6の通りである。現時点で保育士・幼稚園教諭・小学校教諭（すべて「教職」として集計）として勤務していたり、学童保育の指導員・学習教室の運営や地域の子育て支援関連ボランティアの活動をしているなど、何らかの形で子どもと保護者に関わっている者が多く、子どもの育ちの状況に関して具体的な問題意識を持って書かれたリポートが多数あった。とらえている問題について、入学前から解決策を模索していた者や、本学通信の授業によって専門知識を得たり深めることによってさらに意識を高めた者がいることがわかった。教職以外では、学校事務・図書館司書ボランティアのような学校関係者や医療関係者の記述が複数あった。それぞれの職場でどのように貢献できるか、具体的に考えようとする内容が目立った。幼少期の過ごし方の重要性に思いを致し、そのことを中心に自身のこれまでの歩みを自分史のようにふり返って、自身をねぎらう記述も散見された。職場や業界に『閉鎖的で古い体質があるが、大学で学んだ知識や視点は新鮮で、実践の場で返したい』という感想は印象的であった。

##### ②今後の仕事や活動

子ども食堂や子どもの居場所づくりなど具体的な

活動をイメージし、そのために必要な資格の取得を計画したり、研究につなげて大学院を目指したいと書かれたリポートが複数あった。自身の年齢を踏まえて、次世代育成という観点を持って書かれたものもあった。再就職を目指すという意思表示や、PTAや地域の子供会の活動といった身近なところに活かそうとする意見もあり、多彩な内容が読み取れた。

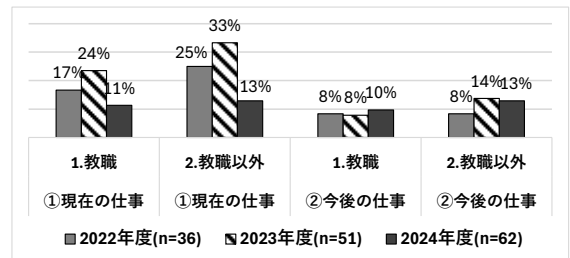


図6 現在や今後の仕事に還元できること（児童n=149）

##### ③自分や家族の生活

このことに言及しているリポートは予想より少なく、2022年度は5名（14%）、2023年度は4名（8%）、2024年度は9名（15%）であった。「社会に還元し・貢献できると思うこと」という「社会」に限定されたようにも受け止められる問いだったので、生活の観点からは書きにくかったのかもしれない。『改めてわが子と向き合う時間を大切にandraえ、子育てに活かす』『子どもの主張に耳を傾け、対話が変化してきた』といった記述があった。

##### ④地域社会

他の2学科と比較して児童学科の特色がよく出ていると思われたのは、本項目である。2022年度は23名（64%）、2023年度は32名（63%）、2024年度は59名（95%）が地域社会への学びの還元を考えていた。図7で示したように、ボランティア、コミュニティへの関心が高く、何らかの形で子ども支援、子どもに対する学習支援、日本語学習を助けて生活面の不安の軽減に役立ちたいといった外国人に対する支援、高齢者の話し相手になる支援の他、育児相談・子育て支援に関わりたいたいなど様々な様式での支援を行っていきたいとする記述が数多く見られた。「支援」「ケア」「ボランティア」「サポート」という単語が頻出した。子どもに限らず、ひとりひとりの幸せを目指して活動したいとする志の高い記述も複数あった。

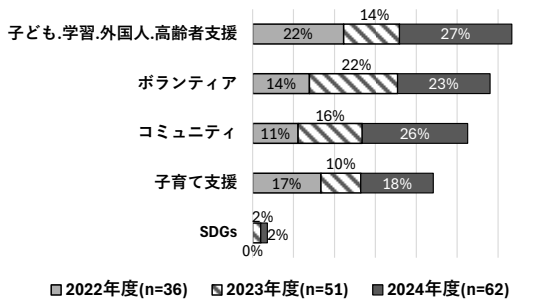


図7 社会に還元・貢献できること（児童 n=149）

## ⑤学びの継続

②でもふれたが、学び続ける意志を示した者もいた。近年、卒論の執筆を希望したり大学院進学への進路選択をしたりと学びの深化と継続を考える学生からの学習相談が増えており、学問や研究に真剣に取り組む姿勢を持つ者は増加傾向にある。今回のレポートの幾つかにも書かれていたが、大学通信教育は単なる学歴を得るための手段や趣味の領域などではなく、厳しく真摯な高等教育である。大学通信教育に対する社会的理解を促進するために、教育の質の維持向上はもちろんのこと、学修の実態を説明したり、卒業生の感想や活躍する姿を紹介するなど、積極的な情報提供も必要とされる。

児童学科は、児童の心身の発達を総合的に研究し、健全な人間形成に必要な知識を修得することを目指している。児童学科の科目以外に必要な科目を加えて履修することにより、幼稚園一種の教育職員免許状及び学校図書館司書教諭の資格を得ることができ、本学大学院家政学研究科修士課程に進学して研究を続けることも可能である（本学通信「履修の手引」より抜粋）。加えて、学科の必修科目を中心に、芸術科目、芸術療法関連科目、心理支援科目などを多角的・総合的に学ぶことによって、子どもの自由で独創的な表現を促進し、個性を大切に育てる意識を持つ保育者や教育者を育てることを目的とした、大学認定の芸術・子ども支援プログラムなど特徴のある科目構成がある。2021年度には認定絵本土の養成講座を開設し、2021年度の入学者から、指定の科目を修得することで資格取得が可能になった。このように、学科のカリキュラム構成に心理・教育・健康・文化・社会について学び考える人を育てるという理念があるため、学生が様々な科目受講で得た

知識やスキルを生活や現場で発揮したいと考えるのは自然な流れであると思われる。

その他、本学通信で学ぶ意義、誇り、本学創立者成瀬仁蔵の建学精神に言及したりレポートが複数あったことは、歴史のある本学の特徴のひとつであると言えるかもしれない。

## 4.2.2 食物学科

食物学科の学生の記述内容を、①～⑤の観点からまとめて、考察する。全体像を図8に示す。

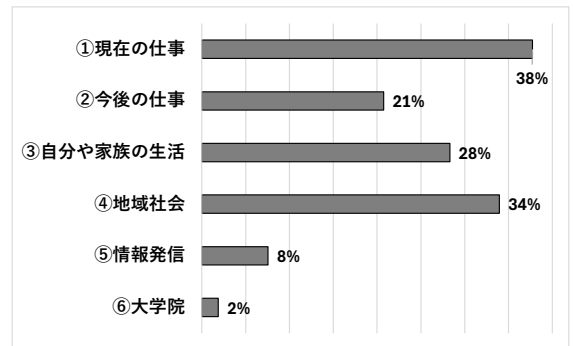


図8 社会に還元・貢献できること（食物 n=53）

### ①現在の仕事

食物学科の学生は、卒業セミナーの時点で専門的な職業についている者が38%を占めていた。職業は栄養士、教員（短大を含む）の他、看護師、歯科衛生士、公務員、理学療法士、料理講師、製薬会社勤務、調剤薬局勤務、化粧品メーカー勤務など多岐に渡っていた。食物に関する知識は健康の維持に必要であるため、幅広い職業の学生が食物学科に入学してきていると考えられる。いずれの職業も食物学科で学習する食品学、調理学、栄養学分野の内容と密接な関連があり、食物学科で学んで得た知識や技術を直接生かすことが可能であると思われる。「健康」「栄養」「食生活」「食品開発」「教育」などのキーワードが認められた。短大教員をしている者は「学んだ内容を直接授業に生かせる」、高齢者施設で働いている者は「栄養学・食品学の知識を栄養指導に活用できる」と記述していた。特定の職業についていない学生の中には、地域社会でのボランティア活動に参加している者もいた。

### ②今後の仕事

今後新たな仕事を探し、学んだことを還元してい

きたいと書いていた者は21%であった。仕事の内容は、高齢者施設での調理担当者、フードスペシャリスト、フードコーディネーター、食生活アドバイザー、微生物の検査、食品開発、教員、飲食ビジネスなどであり、この中では「食品開発」と書いた者が3名(6%)で1番多く、他は1名ずつだった。食物学科では2017年度からフードスペシャリスト養成施設としてのカリキュラムを開講しており、資格取得者を毎年数名ずつ出している。食品開発はフードスペシャリストの仕事の1つであり、興味を持つ学生が多い仕事である。今後卒業生がフードスペシャリストとなり、社会で活躍することを期待する。

### ③自分や家族の生活

自分や家族や友人の生活に還元すると書いた者は、15名(28%)であった。食物学科で学ぶ内容は、食生活に直結した内容であり、健康を維持増進することに役立つ。食物学科に入学する学生はもともと健康に関心がある者が多く、食品や栄養についての正しい知識を求めている者が多い。学習して得られた科学的に根拠のある知識を、実生活に応用しようと考えることは当然であると思われる。

### ④地域社会

地域社会に還元するとした学生は18名(34%)であった。活動内容は、食育活動4名、子ども食堂3名、啓発活動2名、ボランティア2名などであり、特定の職に就かない場合にも、ボランティアとして学んだことを還元しようとする姿勢がうかがえる。子ども食堂やシニア食堂での調理を担当するボランティアだけではなく、食育活動として、啓発活動を考えている者もいた。

### ⑤情報発信

動画を使用して情報発信することを考えている学生が4名(8%)いた。動画の内容として、メニューの他、食に関する正しい情報が挙げられている。

### ⑥学びの継続

在学中に卒業研究を履修して卒業後は大学院に進学して研究を続ける予定の学生が1名いた。食物学科では通学せずに卒業研究をすることが難しいため、卒業研究の履修者は数年にひとりしかいない。大学院に関しては、他大学の大学院への進学を考える者が多く、居住地が関係していると思われる。

食物学科は、家庭・学校・職場などの生活の場

における食物の本質を科学的に究明し、健康的で活動的な心身の発達と維持のために必要な要件を明らかにし、多様化する食生活に対応する理論及びその技能の修得を目指している(本学通信「履修の手引」より抜粋)。今回の本項目の分析結果全体を見渡すと、職業を持っている者もそうでない者も、本学における学びを、自分の生活だけではなく社会に還元することを考えている様子が伺える。食物学科の学生が、学んで得た知識や技術を、自分だけのためと限定せず、他の人のためにも役立てたいと考え、活動できる方法や場所を模索していることが、記述内容から読みとれた。

### 4.2.3 生活芸術学科

生活芸術学科の学生の記述を①～⑤の観点により分類し考察する。

#### ①現在の仕事や活動

生活芸術学科の現在や今後の仕事において還元や社会貢献する記述数の集計を図9に示す。主に仕事についての記述であるが、仕事内容は教職と教職以外とに分けられる。生活芸術学科では中・高校の家庭科の教職免許取得を目指すことができ、現役の教員も多数在籍している。①現在の仕事の1. 教職では『現職の中学校や高校の担当科目において生徒に還元している』などの記述があり、家庭科以外の科目の教員であっても『生きる力』を生徒らに伝授している。教職以外ではアパレル販売やインテリア、建築業、不動産業、福祉や医療関連の仕事が挙げられている。職種によって異なるが『職場でのユニバーサルデザインの実践』『顧客への対応・提案』『住み続けを支援』『就労により人手不足の業界に貢献』『責任ある仕事に誇りをもって取り組む』などの記述がある。

#### ②今後の仕事や活動

今後の仕事や活動では、やはり主に仕事に関する記述であるが、教職と教職以外に分けると、教職以外に関する記述が2023年度、2024年度と増加している。教職では、『家庭科の教員になったら専門知識を授業に活かしたい』、また家庭科以外の教員においても『家庭科教員と連携し教科横断型の授業を組みたい』など、授業での還元の意欲が示されている。教職以外では、卒業後に資格取得後の新たな就職や転職先で自分にできると思われることが記述されている。『福祉住環境コーディネーターを取得し、



加齢による困難への対応方法を発信』『住宅リノベーションの仕事に従事』『二級建築士を取得して仕事の幅を広げて社会に貢献』『建築士になったら心地よい空間を提案し社会貢献』など、将来への希望も含まれつつも職業意識の高い記述が多い。建築士への言及は年々増え、2024 年度では教職以外の仕事の約半数から挙がっている。2017 年度より二級建築士受験資格カリキュラムを導入した結果が表れている。

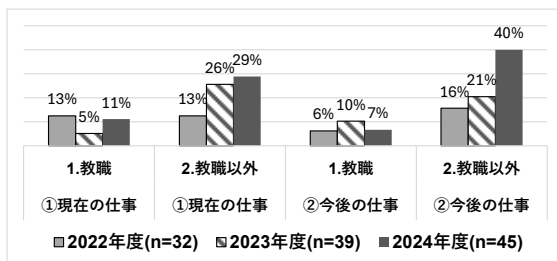


図9 現在や今後の仕事に還元できること (生芸 n=116)

### ③自分や家族の生活

自分や家族の日常生活に還元するという記述は2022 年度 (9%), 2023 年度 (23%), 2024 年度 (36%) と増加している。内容としては『高齢の親のために実家の見直し』『服作り』『在宅ワークのための環境整備』『家族や友人に家政学を伝承』『自宅の建て替え』などの記述がある。生活芸術学科で学んだ繊維や洗濯、住環境整備の知識を日々の暮らしの中で実践し、周囲に影響力のある人になることが社会貢献に繋がる、という論旨のものが見られた。

### ④地域社会

地域社会に還元・貢献はどの年度も8～9割の学生が言及している。記述の中に多く出てきたキーワードを図10に示す。3年間合計で最多の「SDGs」は、地球環境問題や持続可能性、サステナブル等の文言も含んでいる。『環境に配慮して衣類や建材のリサイクル』『CSR活動に参加し持続可能な社会を意識した暮らし方』『里山の保全や環境保護』など自身の暮らし方や地域活動の中での実践を書いている。コミュニティでは『町内会活動』『清掃美化、緑化活動』『地域活性化、住み良い街づくりに協力』『古民家の保存活用』など、ボランティアでは『小学生に物づくりを教える』『図書館で読み聞かせ』『育児補助や高齢者の見守り』など幅広い活

動が挙げられている。「ユニバーサルデザイン」は衣生活、住生活分野両方で扱う概念であり、同名の科目の授業の印象も大きいと思われる。同様に「消費者問題」は衣生活分野に、「空き家問題」や「防災活動」は住生活分野の学びと関連づけた記述が見られた。これらの活動を現在ではしていないが、今後は気にしていきたいという論旨のものが多く、学科の学びの成果と言えよう。

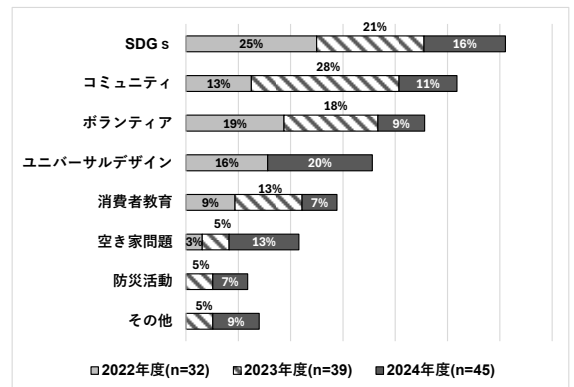


図10 地域社会に還元・貢献できること (生芸 n=116)

### ⑤学びの継続

卒業後も勉学を続けることが、社会への還元につながるという記述もある。『服作りを研究し、研究結果を社会に還元したい』『インテリアプランナーや消費生活アドバイザーに挑戦』などである。新たに異分野の資格取得も視野に入れている記述もあった。

以上、生活芸術学科の学生は、学科で学んだ生活に直結する家政学の知識を、日常生活や教職や教職以外の服飾、建築関係などの仕事に活かすことが、家族や関わる生徒、顧客への還元になると考える記述が多く見られた。一方で環境問題やコミュニティ、ユニバーサルデザインなどの意識が高く、地域活動を通じて社会貢献をしたいという記述も多かった。地域社会や地球環境へと視野が広がり、社会の中での自己の役割を明確に意識するようになったことが窺える。

### 4.3 通信教育への期待

「家政学部通信教育課程の学びを通して、これからの通信教育に期待すること」についての学生の感

想をまとめ、考察する。

3学科とも概ね似た傾向となっているが内容別にグループ化すると、①授業形態の充実、②授業内容の充実、③学びやすい環境づくり、④大学の支援、⑤交流機会の増加、⑥その他の6つに大別できた。上記の大項目について、全学科の結果を図11に示す。

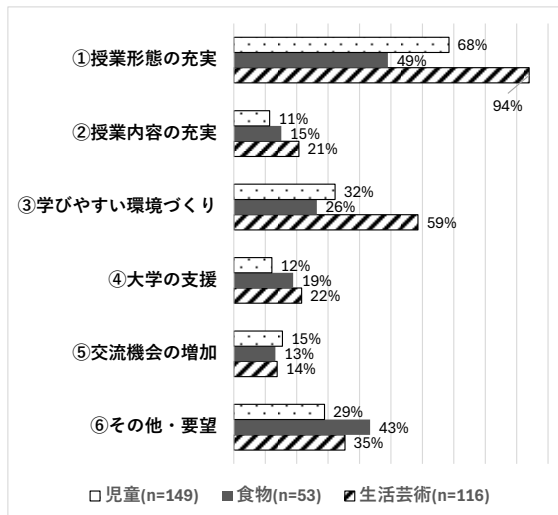


図11 これからの通信教育に期待すること (n=318)

### ①授業形態の充実

授業形態の充実に関する記述は、6つの分類の中で一番多く見受けられた。その内容を見ると『多様な選択肢を増やしてほしい』といった意見をはじめ、スクーリング授業に関する意見が多かった。スクーリング授業に関しては、遠方や地方在住者からの『遠隔での授業を増やしてほしい』という意見が多く見られた一方、対面での授業の大切さを痛感したという声も見受けられた。また、授業や科目修了試験に関するICT化を進めてほしいとの意見もあった。これらの意見に関しては、2020年度の夏期以降2021年度まで、本学ではスクーリング授業が新型コロナウイルス感染症の感染対策として面接授業から遠隔授業に変更された時期があり、その影響が出ているものと考えられる。ただし記述の中には、『筆記のリポート提出や試験の方式を残してほしい』などICT化に対して後ろ向きな意見もあり、デジタルデバインドに十分配慮する必要があることがわかった。

### ②授業内容の充実について

授業内容の充実に関する意見には、『共同学習やアクティブラーニングを積極的に取り入れてもらいたい』、『実社会で役立つ実践的な授業を増やしてほしい』、『授業の質を落とさないでほしい』などの意見が見られた。社会人の学生が一定数いること、人と人との関わりを持ちつつ学修を進める機会が少ないことなどが要因として考えられ、通信教育学生がより多くの学びの機会と高度で実践的な授業内容を要望しているものと推察される。

### ③学びやすい環境づくり

学びやすい環境づくりに関する記述では、『学費』、『科目修了試験』、『図書館の利用』、『卒論・大学院進学』、『多様な学生へ門戸を開く』などのキーワードが挙げられた。内容としては、『学費を安くしてほしい』、『科目修了試験の回数を増やしてほしい』、『図書館の本を郵送で貸し出ししてほしい』など、勉強しやすい環境への要望が目立った。通信教育学生は、さまざまな環境下で学びを深めており、学修を継続させるためにも教育環境をさらに充実させ、多様な学生に向けて門戸を開いていく必要があるであろう。

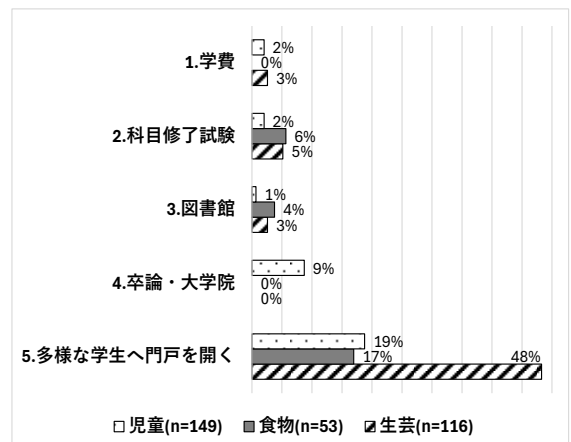


図12 学びやすい環境づくりに関する内容 (学科ごと)

特徴的な傾向として、特に生活芸術学科の学生から『多様な学生へ門戸を開いてほしい』という意見が毎年多く挙げられていることがある(図12)。生活芸術学科は衣生活分野と住生活分野の2分野で成り立っており、様々な職業や年齢、ライフスタイルの学生が在籍している。そのためスクーリング授業

等での学生同士の関わり合い等を通じて、個々の学生のもつ学習上の課題を考慮し合った結果ではないかと考えられる。

#### ④大学の支援

この項目に関しては、「学習支援」「障害者支援」「就職支援」などのキーワードが抽出できたが、「学習支援」に関するものが大項目の約77%を占めており、一人で学ぶことが多い通信教育ならではの結果となった。『レポートの書き方を詳しく指導してほしい』、『ICT スキル教育を行ってほしい』など、初年次教育を手厚くしてほしいと言った要望、『学習相談のスピーディー化』、『サポート体制を拡充してほしい（対応の時間、曜日の増加ほか）』などの意見がみられた。

#### ⑤交流機会の増加

この項目では、『学生同士、学生と教員、卒業生との交流機会を増やしてほしい』といった意見が寄せられた。コロナ禍で人とコミュニケーションをとる機会が少なかった時期の学生の希望を色濃く反映しているものと思われる。

#### ⑥その他・要望

様々な意見があったが、『本学の学生として品位を持って行動してほしい』といった在学生に向けた意見や『通信教育に関する社会での地位向上を目指してほしい』、『資格コースを充実させてほしい』、『家庭科教員の養成校として通信教育課程を長く存続してほしい』等の意見があった。

以上をまとめると、「いつでも、どこでも、だれでもできる学び」である生涯学習の一つの選択肢としての通信教育のさらなる発展を望む声が多く聞かれた。2020 年度からのコロナ禍を体験し、人と人との接触が制限され、不自由な状態での遠隔授業を体験した学生にとって、大きく2つの要望があると捉えることができるだろう。1つは様々な制約下においても不自由のない教育のための情報化による授業構築であり、2つ目は人と人との交流機会への渇欲である。より良い授業を提供するために、通信教育課程をもつ大学は、授業内容や方法に関するさらなる検討、進化を続けていく必要があるといえよう。

## 5. まとめ

日本女子大学通信教育課程の卒業セミナーにおける課題のレポート3年度分を分析した結果、以下の

ことが確認できた。

「自分の財産になったこと」「社会に還元・貢献できること」の記述からは、各学科の学びの成果が良く表れており、本学で学んだことを活かして社会に還元、貢献していこうとする学生の姿勢や意欲を読み取ることができた。家政学の学びを日常生活から地域社会、さらに地球環境までの広い視点で捉え、知識修得にとどまらず、自分で実践できることを真剣に考えることができていた。一例として『子ども食堂』に関わる活動はどの学科の学生の記述にも出てきた。児童学科はケアや支援、食物学科は調理知識や技術、生活芸術学科はコミュニティやユニバーサルデザインの観点から、など学科により関わり方の手段の差異はあるものの、活動の根底にある目的は、本学が目指す家政学に基づく姿勢であろう。また各学科が 2016 年度以降に導入したプログラムや資格取得のためのカリキュラムが浸透し、実を結んでいることも随所に確認できた。

「通信教育への期待」の記述では、通信教育で学んだ経験を踏まえた要望が、その意義や本学への感謝の言葉とともに挙がり、期待の大きさが感じられた。レポートの書き方などの基本を教えてほしいといった初年次教育充実の要望に加えて、遠隔授業が増え、授業登録やレポート提出に ICT 技術が必要な状況になっていることから、ICT 教育の充実はこれまでに増して求められている。コロナ禍を経て、場所や時間を選ばず、通学せずとも学べる自由度が高まった反面、人との繋がりの重要性も再確認されたことがわかる記述もあった。今後は面接授業と遠隔授業の融合など、多様かつ柔軟な授業形態の運営が必要となるであろう。

前回の本学卒業生の調査<sup>4)</sup>では、通信教育の学びにより得たものに『自信や誇り』が最多で挙がり、自身の家族関係に関するネガティブな記述も散見された。本稿にも家庭内の状況に関する記述はあるものの、その内容は概して明るく、学生の視点はさらに職業や地域社会に広がっている。学士入学者が増加していることや、女性を取り巻く就労環境など時代背景の変化の表れでもあろう。また本学通信への期待の項目では、当時より ICT 化はかなり進化したものの、学習支援や通信教育の認知度の高まりへの期待は変わらず、引き続きの対応が求められている。状況やニーズにおいて、より多様な学生の増加が予想される今日、歴史の長い本学にあっては社会の動

向を見据えた変革を迫られた思いである。

本研究は本学通信の卒業見込者の所感を分析した一考察であり、大学通信教育の一般論として語るには限界がある。限られたデータの分析ではあるが、得られた結果を丁寧に検討して、今後の通信教育の発展と教育内容・方法の充実に活かしていきたい。

## 謝辞

本研究の実施に際しまして、本学前通信教育課程長森理恵先生、現通信教育課程長飯田文子先生には格別のご配慮をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。また課題リポートの分析について快くご承諾くださいました対象者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 中央教育審議会大学分科会 高等教育のあり方に関する特別部会 高橋陽一：大学通信教育の規模とアクセスと質 [https://www.mext.go.jp/content/20240531-koutou02-000036245\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240531-koutou02-000036245_3.pdf) (2024 年 9 月 16 日閲覧)

- 2) 文部科学省 令和 5 年度学校基本調査：[https://www.e-stat.go.jp/stat-page=1&layout=datalist&tokei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001212520&tclass2=000001212545&tclass3=000001212546&tclass4=000001212551&cycle\\_facet=tclass1%3Atclass2%3Atclass3%3Atclass4&tclass5val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-page=1&layout=datalist&tokei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001212520&tclass2=000001212545&tclass3=000001212546&tclass4=000001212551&cycle_facet=tclass1%3Atclass2%3Atclass3%3Atclass4&tclass5val=0) (2024 年 9 月 16 日閲覧)
- 3) 公益財団法人私立大学通信教育協会 大学通信教育の現状（データ集）：<https://www.uce.or.jp/about/data/> (2024 年 9 月 16 日閲覧)
- 4) 浅見美穂，工藤千草，小野京子，浅野雅子，定行まり子；通信教育課程卒業生のアンケート調査，日本女子大学紀要 家政学部 第 68 号，pp171-181, (2021)

## 註

- 註 1) 図 1 ではキーワードの大項目「①学習に関すること」に図 2 で示す 7 つの小項目が含まれている。学生ひとりが複数項目にわたり記述する例が多数あったため、母数に対して 100%を超える結果となっている。